
狐の苦いシロップ

風亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐の苦いシロップ

【ZPDF】

Z0937Z

【作者名】

風里

【あらすじ】

死よりも辛い生か、残酷な死か。

飢えに苦しむ一匹の狐は、選択を迫られます。

(前書き)

この小説は、
ブーランクの『クラリネットソナタ』第一楽章をモチルにしていま
す。
(動物の擬人化にご理解のない方の閲覧はお控えください。)

(俺は、……ここで死ぬのか……？)

冬の空は、温かい日差しが時折、雲間から降り注げりつゝも、
どこか物憂げだった。

吹き抜ける風は冷たく、ひんやりと肌を撫でる。

生気が尽き果て、花も木も、冷たい風と畳に促され、
誰にも見向きもされないが、ひつそりと眠りにつこうとしている。
そしてまた、延々と広がる人気のない荒れ地を、
ふらふらと覚束ない足取りで歩いている一匹の狐も、
その命を終えようとしていた。

(……つ、きっと、もう少し歩けば、餌にありつけるはずだ……。)

そう思いながらも、心の何処かでは、
もう餌にありつける事は無いだろう、と悟っていた。
そこは、人も、他の生き物もいない、荒れ地だった。
人間の手が入るのを拒むように、

噎せ返るような死の臭いを放つそこには、

枯れ木が數本と、木から落ちた茶色の葉っぱだけしかなかつた。
餌など、あるはずがない、分かつてはいた。

運良く水にありつけたとしても、それは、死の水だ。

飲んではいけない、飲むと、身体の内側から痺れ毒が回つていき、
身体の感覚がじわじわと無くなつていき、あまり苦しみはしないが、
ゆっくりと死に至るのだ。

そして、死に至る直前、すっかり全身の感覚が消え失せた頃、
走馬灯のように、今までに自分が一番思い出したくない事が、
何度も、何度も駆け巡り、後悔や悲しみの中死を迎える、
出来れば、味わいたくない痛みだった。

狐は先程から、極度の疲労から、ピタリと足を止め、
その泉の前で立ちすくんでいたのだ。

飢えに苛まれ、絶え間ない空腹を味わい、この世界を恨みながら死ぬか、
感覚が無くなる代わりに、あの忌まわしい思い出を胸に抱いて死ぬか。

しかし、田の前にある泉からは、死をもたらすとは到底思えない、食欲をそそり、とても美味しいそうな、甘い匂いがした。

狐には、それが死の甘美な誘惑だと分からなかつたのだ。

それほどに、狐は飢えていた。

たつた一滴の水すらも、今の狐にとつては、天上の甘露のようであつた。

……「クリ、狐は生唾を飲み込んだ。

（俺は、……つ、畜生、……こんな所で……。）

狐は今、孤独だつた。

自分の死を誰も看取つてくれない事が、この上なく、悲しかつた。

沈みゆく夕日が、狐を優しく照らし出しうが、それでも、

孤独は收まるどころか、一層大きな炎となり、狐の心を焦がしていつた。

同情も、慰めも、有難く受け止める事が出来なかつた。

狐は泉に鼻先を近付け、恐る恐る、クンクンと匂いを嗅いでみた。すると、何とも心地の良い匂いが、鼻腔から風のように、すうつと忍び込んできた。

それは、どんな同情よりも、どんな慰めよりも、

今の狐の心を強く打つた。

吸い込まれるように、狐は泉の中に顔を埋め、その水を口一杯に含んだ。

その水は程良く甘く、狐の喉を隅々まで潤した。

と、同時に、味わつた潤いはそのままに、後ろ足から前足へ、じんわりと痺れが広がつていった。

やがて、立つてバランスを取る事が出来なくなると、

狐は、とうとう力尽きたのか、地面に突つ伏してしまつた。

足から毒は広がり、全身をすっぽりと覆い、包み込んでいた。

嗅覚から伝わる毒はますます甘美に、眩暈がするほどにきつくなり、遂に、瞼を開けている事も出来なくなってしまった。

意識してみると、全身の感覚が全く無かつた。

まるで、最初から無かつたかのよう、綺麗に消え去ってしまった

いた。

ふと、脳裏を一つの絵がよぎった。

ぼんやりとしたイメージが、徐々にはっきりし、

色濃く鮮明になっていく。

そうだ、これは、あの時の、……忌々しい、心が締めつけられる…

…。

自分が、仲間と共に縁豊かな平原を旅していた頃、あまりの空腹に襲われた時、眠っている仲間の狐を食い殺してしまった、

その時の一瞬始終だった。

身体中、甘美な匂いに包まれ、安らかな死へと向かっていき、もう何も考えられないくらいなのに、その映像だけは、

忌まわしき思い出は、狐の罪悪感を甦らせるように、

狐の胸をギュツ ときつく締めつけた。

本当は、狐も好きで仲間を殺したわけではなかつた。

ただ、死ぬのが怖かつたから。

生きたかつたから、生への渴望が、

狐にその残酷な選択肢を選ばせたのだ。

そして、その映像は今、死を迎えるとしている今、何度も繰り返され、いつまでも、狐の心に残り続けた。

その狐が命を落としてからは、ますます死の臭いがきつくなり、数週間が経つた頃には、その地には一本の木も、一枚の葉つぱも無かつた。

ただ、荒れ地の中央に位置する泉だけは、周辺の土壤、死の祝福を受けた大地を通じて狐の命を吸い、

一滴も残らず生き汁を啜り、より深い藍色に染まり、
新たに生まれる命を誘惑し、懷柔し、
その背に残酷な刃を振り下ろすべく、
泉の奥へ、底の無い泥沼へズルズルと引きずり込まれ、
静かに佇み、甘い匂いを放つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0937n/>

狐の苦いシロップ

2010年10月21日23時30分発行